

カオ、ガン からの 贈りもの

Sakiyama Katsuhiko 崎山克彦



カオハガン

からの

贈りもの

江苏工业学院图书馆
藏书章

■著者紹介

崎山克彦（さきやま かつひこ）

1935年（昭和10年）、福岡県生まれ。慶応義塾大学卒業。講談社、講談社インターナショナル取締役、マグロウヒル出版社社長など、30年間のサラリーマン生活を送る。1987年、フィリピン・セブ島の沖合10キロに浮かぶ周囲2キロの小島・カオハガン島と出会う。島を買い、1991年（平成3年）、会社を辞めて移住。現在、島民約400名と共に、小さなホテルを運営しながら暮らしている。NGO「南の島から」代表。著書に『何もなくて豊かな島』（新潮文庫）、『ゆっくり生きる』（新潮社）などがある。

【連絡先】

カオハガン島への直通	63-917-623-3158
NGO「南の島から」事務局	0467-23-5937
カオハガン島への旅行にご興味のある方は、	
オンワードトラベル	03-5476-5188

JASRAC 出 0315518-301

カオハガンからの贈りもの

2004年1月15日 第1刷発行

2004年1月26日 第2刷発行

著者 崎山克彦

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

〒104-0045 東京都中央区築地 2-11-26

電話 03-3542-9671（代表）

FAX 03-3541-5484

郵便振替口座 00110-9-44886

印刷・製本所 モリモト印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取りかえします。

©2004 Katsuhiko Sakiyama, Printed in Japan

ISBN4-7593-0797-4

カオハガンからの贈りもの
目次

第一章 ✧ 宇宙の調和と循環の中の島

♪ フロローグ ♪

南の島の暮らし…………… 8

私たちも自然の中で暮らしています…………… 13

亜麻色の砂の大きな広がり…………… 20

偶然の宇宙なのか、意図された宇宙なのか…………… 28

宇宙の創造の主をはつきりと感じたとき…………… 39

父は空 母は大地…………… 51

はだしで大地を歩くと…………… 61

第二章 ゆつくりと時の流れる豊かさへ

「経済」を考えてみよう……………74

人間的で自由な「成熟した豊かさ」の暮らし……………88

太陽と風のクリーンなエネルギー……………99

これからの「良い地元」の条件……………112

自動車と白い帆をかけた小船……………127

第三章 お金やモノではない豊かさ

「おいしい食事」って何だろう……………142

第四章 人類が壊れ始めている

飄々^{ひょうひょう}と風のように生きるジュリー……………155

何もなくて豊かな島民の暮らし……………160

タリサイの木陰でゆつくりしよう……………172

島民の非日常の世界……………192

夢、そして海……………206

人類は、今、大きな過ちを犯しているのでは……………218

明るいつ未来を創造するために……………232

「家住期」「林住期」「遊行期」を経るのがしあわせな人生……………245

皆で共有しなければならないこと……………259

第五章 ＊自分との対話からほんとうの豊かさが始まる

「素直な心の声」に沿って生きる

270

♪ エピローグ ♪

283

写真（カバー・本文）

熊切圭介

写真（本文69ページ）

渡邊 肇

デザイン（装丁・本文）

村橋雅之

地図作成

仲佐忠治

カオハガンからの贈りもの

ブローグ

南の島の暮らし

ゆっくり、ゆったりと
時間が過ぎていくのです。

小さな南の島に暮らし始めて、もう十四年目になりました。

北緯十度にある、熱帯の島です。フィリピン共和国の中央部、セブ島とボホール島の間にあります。

周囲が百キロ以上もあり、七つの島が点々と輪のようにつながった、真珠の首飾りのようなうつくしい「オランゴ環礁^{かんしょう}」。その一つで、珊瑚^{さんご}でできた白い砂に縁取られた、小さな島です。

面積は約五万平方メートル。東京ドームと同じ大きさです。

島の名前は、カオハガン島。

さえぎ
遮るものがまったくなく、大きな大きな海洋の自然に囲まれた世界です。

大洋を渡ってきたさわやかな風が、ココ椰子の大きな葉を揺らし、島を吹き抜けていきます。ハイビスカス、ブーゲンビリア、プルメリアなどの熱帯の花々が、いつも咲き乱れます。

そこには、ゆつくり、ゆつたりとした時間が流れているのです。

何もなく、シンプルな暮らし

初めてカオハガン島に出会ったとき、そこには、約五十家族、三百五十人の島民が暮らしていました。

子どもの数がとても多くて、平均すると夫婦に子どもが五人くらいです。

島民の住んでいるのは、ほとんどが、一間の小さな家です。大きいので八畳くらい、小さいのは四畳半くらいでしょうか。地面から一メートルくらい上がった高床の家で、床は割り

竹で張つてあります。壁は、竹を割きいて編んだもの。屋根はニツパ椰子の葉で葺ふいてあります。

すべてが、島の中か、周囲の島々で手に入る自然の素材です。家の中にいても、壁越しに外の光がチラチラと見え、自然の中にいるような香りが感じられるのです。

島民は、近所の人の手を借りながら、自分で、そんな家を建ててしまえます。

小さいけれど家の中はガランとして、けっこう広々としています。通常は小さな棚のようなものがあつて、そこに、寝具として使っている自分で草を織つて作ったゴザ、それから、家族の着るものなどが積んであります。でも、たくさんの量ではありません。

一年中、暖かな気候ですから、いつも、Tシャツに短パンといった服装です。そんな、数少ない着るものを、島民は毎日こまめに洗濯します。それから、家の内外の掃除もよくします。だから、とても清潔な暮らしなのです。

別に、小さな台所のようなものが建ててあります。土間があつて、そこで薪を燃やして炊事をしています。そこに、炊事の道具、食器が置いてあります。お鍋が一つ、家族の数だけ

のお皿、コップ、スプーン。

島民の持っているモノは、ほんとうにこんなものだけなのです。持っているモノがすごく少ないのです。

一日に二度、潮の満干^{みちひ}が繰り返されます。潮が引くと、珊瑚礁の内側にかんりの広がり的大海が露出します。そんなときに、ほとんどの島民は、男も女も、子どもも、手に小さな入れものを持って、ゾロゾロと磯に出かけます。そこで、小魚や貝、イカ、タコ、エビ、海草などの海の幸を採ってくるのです。それに、島のどこにでも生えている、何種類かの葉っぱを入れ、塩や酢で味付けをして、その日のおかずにするのです。

ほとんどの家で鶏を飼っています。放し飼いなので、島を歩くと、鶏の親子連れによく出会います。

豊かな自然の恵みを受け、他に頼ることのない暮らし

島民はこんな暮らしをしているのです。

日々の衣食住を満たすことが、それが「仕事」なのです。複雑でない、とてもシンプルな暮らしです。そして、このシンプルな暮らしをおくるためのすべての技術、漁をしたり、家を建てたり、船を作ったり、それを修理したりの技術を、島民全員がしっかりと身に付けているのです。

まだ陽射しの強くない朝のうちや、陽が陰った夕方にこんな仕事を片付けます。日中は、大きな木陰に竹で作った縁台を持ち出して、昼寝をしたり、近所の人が集まっておしゃべりをしたりして、ゆつくりと過ごします。

暗くなつてからは、ランプの灯をともし、家族で団欒だんらんをしたり、近所の人と椰子酒を飲んだり。そして、早くに寝てしまいます。それから、子どもづくりに励むのでしょうか。一日が、ゆつくりゆつたりと過ぎていくのです。今日、しなければならぬということは何もありません。急ぐことは何もないのです。豊かな自然の恵みを受けて、他に頼ることの少ない、あせることのない、満ち足りた暮らしです。将来をクヨクヨと思うことなどまったくありません。ゆつたりと、皆が、「今」を生きているのです。

私たちも自然の中で暮らしています

ゆっくりとした時間、新鮮な自然の驚き。

それは、心も身体もゆったりとする暮らしなのです。

一九九一年に、そんな島民の暮らしに、パートナーの順子とふたりで入っていったのです。島での私たちの一日はこんなふうに過ぎていきます。

辺りが明るくなつた午前五時半ごろに、自然と目が覚めます。

島の南側の白砂の海岸沿いにある、隣の隣の島に住んでいる竹の建築の名人ベニートじいさんに作ってもらった、竹だけでできた建物が私たちの家です。地上から二メートル以上も上がった六畳くらいのスペースの真ん中に、これも竹で作ったベッドが置いてあります。そして、周りには壁がありません。木々の緑に囲まれて、さわやかな風が吹き抜けていくのです。風のざわめきの中に、鳥のさえずりが聞こえます。

六時にはもう起き出して、海岸沿いにある「書斎」の、広い竹を張った床に座ります。も

う真ん前が海です。八本のココ椰子の柱が、コゴンという草で葺いた大きな屋根を支えている、これもまったく壁のない、開放たれた空間です。

そこで、本を読んだり、文章を書いたりして過ごします。大きな自然、ゆったりと過ぎる時間の中で、ゆつくりと、深く、ものを考えることができます。それから、島での出来事を考えたりもします。

八時に朝食です。島で、小さな宿泊施設をやっていますから、その母屋に行つて、スタッフや、お客さんたちと一緒に食事をするのです。

食事が終わると、また書斎に戻つて、午前中と同じように、ゆつくりと自分だけの時間を過ごします。

この朝と午前中の約五時間は、自分で少しプレッシャーをかけて、「何か」をするように心掛けています。

昼の食事、また、母屋で済ませます。それからあとの午後の時間は、まったくの気のむいたまま、自由に過ごします。昼寝をしたり、浜辺で寝転がったり、海で泳いだり、カヌー